

- 1) 建設工程および建設費用は今年(2009)の要求通りとする。つまり、建設開始年度は2011(H23)年度で建設終了年度は2015(27)年度。予算額はトンネル掘削を含めて155億円。ただし、装置完成後に設けるコミッショニングの2年は2015年度までに組み込む。
- 2) CLIOの成果を引き継ぐ実機版クライオ装置によるR&Dを2010年度に開始する(大型科研費、3年間、10億円程度)。このR&Dの目標は、LCGTトンネル掘削完了の2013年度にインストールできること。
- 3) 2015年度の観測は、その時点の品質のサファイヤ鏡で耐えられるパワーとし、LCGTフルパワーの実現は2016年度以降としてもよいとする(鏡だけを取り替えられるようにしておく)

以下、注釈

- 従来の計画を変えない利点は、これまで東大本部や学術機関課に説明し、かつ、それらの人々が頭に描いている計画と同一であること。また、基金のヒアリングでも質問があったように、我々の計画の大きい特徴は低温鏡であり、これまでそれを強く主張してきた。この低温鏡開発に、宇宙線研では10年以上R&Dを進めている。この低温鏡によって、Advanced LIGOで問題となっている多くのことをクリアできる。一方、室温鏡に発生する問題について、我々はほとんど研究をしない。また、R&Dとして、TAMAのマンパワーを引き継ぐCLIOの成果を活用する計画とすることにより、研究の継続性も確保できる。
- 以上の提案では、来年度からスタートする大型科研費の取得を前提としているが、天文台の人員の統合も視野に入れて計画を進めるように申請をすること、低温技術ではおのずとKEKを巻き込むことになることなどにより、重力波グループ内の広範な支持を得て、周辺の関連分野の人々も納得できる内容にする。科研費代表は大橋君が適任。